

四季成り性イチゴ新品種 みよし について

川下輝一

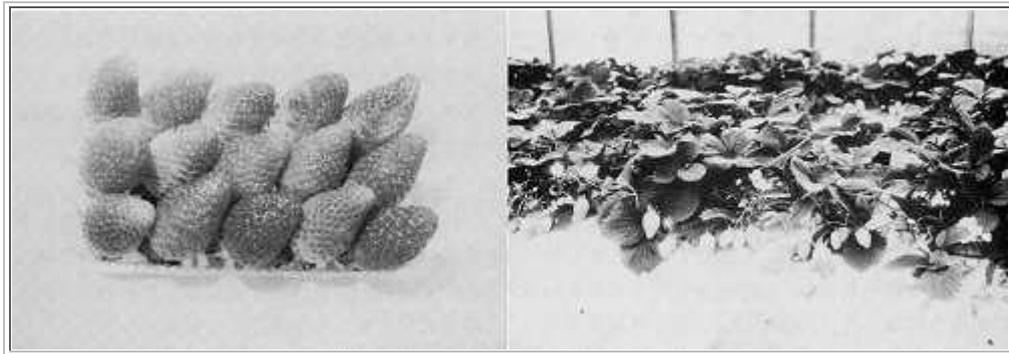
A new ever bearing strawberry variety Miyoshi
Teruichi Kawashita

要約

川下輝一(1988):四季成り性イチゴ新品種 みよし について。徳島農試研報25;1~4山間地の夏秋どり栽培に適するイチゴの新品種として四季成り性イチゴ みよし を育成した。

育成は1980年 媛育 に 大石四季成 を交配した実生苗から最も優秀な系統を選抜して行い,1985年, みよし と命名した。

果実は小型であるが,長円錐形で整い,食味は良い。適用地域は標高900m以上の山間地域で,適する栽培型は8月から11月のケーキ用イチゴの需要を満たす夏秋どり雨よけ栽培である。



はじめに

徳島県における山間地域の夏秋野菜はトマト,インゲン,ホウレンソウなどの比較的収益性の高い品目を基幹とした多品目少量生産が定着している。しかし,耕地が狭い山間地域の振興を図るには,さらに収益性の高い野菜を導入する必要性があり,そのためには地域の気象条件に適合した新品目の開発が効果的であると考えられた。

そこで,夏秋期出荷に焦点を絞り,市場における野菜の需給を調査した結果,県下の高収益野菜のなかで,イチゴだけは夏秋期の供給が少なく,周年供給体制が確立されていなかった。

また,夏秋期におけるイチゴの需要は,ほとんどケーキ用に限られており,ケーキの販売動向に係ると思われたので,ケーキを製造・販売している店舗から聞きとり調査を行った。その結果,販売の中心はイチゴケーキであることおよび販売数量の季節的な変動は,気温が関係し,暖くなる4月頃から減少しはじめ,5月の連休明けからはほとんど需要がなくなり,製造をとりやめるといった実態があった。

しかし,冷房の普及や食生活の多様化が見込まれる将来においてケーキの需要は増加することが予測され,ケーキにはイチゴが載っていることが必須条件と考えている子供のニーズを満たすことができることから,夏秋期のイチゴ需要は増加するであろうと推測された。この季節には国内産が少ないため,1984年度におけるイチゴの輸入量は3,175tの実績¹⁾があり,需要は増加傾向にある。

イチゴの一般的な夏秋どり栽培は,秋に花芽分化した苗を冷蔵貯蔵し,夏秋期に出庫・定植する一季成り性品種を用いる栽培と,大石四季成に代表される四季成り性品種を用いる栽培がある。しかし,いずれもケーキ用としての形質に欠点があり,これらを補うと共に,イチゴ産地でない夏季冷涼な山間地域への導入を想定し,育苗・栽培が容易で,しかもケーキ用イチゴとして評価の高い徳島農試育成の 芳玉 がもつ外観や形状と食味の良い品種を目標に,1980年から育成を始め,幸い目標にかなった系統を選抜したので みよし と命名し,種苗登録申請した。種苗法による登録が1987年6月10日第1324号として完了したので,育成経過と特性を報告する。

育成途上における現地試験には,水の丸露地野菜生産組合の方々並びに三好郡農業協同組合の田村純二氏には産地成立と商品化の御尽力をいただいた。ここに記して厚くお礼申し上げる。

1. 育成経過

1980年に 媛育 (愛媛農試育成)に 大石四季成 (大石園芸研究所育成)の花粉を交配した。前者からは果形・食味など一季成り性品種の優良形質を、後者には夏に花が咲く四季成り性と耐暑性を期待した。

1981～1982年の2年間に、交配して得た500株の実生苗を露地栽培し、四季成り性で果形の良い17系統を選抜した。1983年には、雨よけ栽培を行い、果形、収量、草勢、食味を基準に、夏秋どり栽培の適応性の検定をして、最も優秀な系統No51を決定した。1984年には現地適応性と商品価値を検定するため、標高900m地帯での現地試作を雨よけ栽培で実施し、第1表に示じたように市場性が認められ、また育成目標どおりの形質を備えていることを確認して、育成を完了した。

第1表 現地試作における出荷数量(5a・1984年)

容量	等級	階級	数量(パック)	単価(円)	金額(円)
200g	秀	2L	250	500.00	125,000
	"	L	1,531	470.39	720,170
	"	M	499	391.88	195,551
	"	S	16	400.00	6,400
計			2,296パック		1,047,121円

2L:15個詰, L:18個詰, M:21個詰, S:24個詰

II. 品種特性

品種特性の概要は第5表に示したとおりである。

第5表 みよしの特性

形質	形質に係る特性	形質	形質に係る特性	形質	形質に係る特性
植物体		花べんの大きさ	中	へた離れ性	難
草姿	中間	花べん色	白	がく片のつき方	反転
草勢	強	花べん離脱の難易	易	果形に対するがくの大きさ	やや大
草丈	中	やくの大きさ	中	生態的形質	
分けつ性	多	花柄長	中	花芽分化期	
葉		花柄の太さ	中	開花始期	
葉色	緑	花柄切断の難易	中	花(果)房当たり花(果)数	やや多
葉の形状	平面	果実		開花位置	束生葉と同水準
葉の厚さ	中	果肉色	淡紅	成熟期	早
小葉数	3枚	果心の色	やや淡赤	成熟日数	短
小葉の大きさ	中	果実の空洞	小	季性	四季成り
鋸葉状	中間	果実の大きさ	小	耐暑性	高

葉数	中	果形(第2果以降)	長円錐	耐低温性	中
葉柄長	中	乱形果の形	双頭状	耐干性	高
葉柄の太さ	中	第1果と第2果の果形の差	中	休眠性	中
葉柄のアントシアニン着色	無	ネックの有無	無	病害抵抗性	
ランナー		果実のみそ	少	うどんこ病抵抗性	低
ランナー数	やや少	果実の硬さ	中	灰色かび病抵抗性	低
ランナーの着色	赤色	果皮色	赤	その他形質	
ランナーの太さ	中	へた下の着色の難易	易	可溶性固形物含量	高
ランナーの発根の早晚	早	果の光沢	中	酸度	中
花		無種子帯	少	果実の香り	中
花の大きさ	中	そう果の落ち込み	表皮並	輸送性	高
花べん数(第1花)	5~8枚	そう果の数	密	日持ち	長
花べん数(第2花以降)	5~6枚	そう果のアントシアニン着色	中		

1. 果実

果実の大きさは小であるが、肥大中の気温が低い秋冬期の1番果は20g以上になる。果形は長円錐形で整い、第1果と第2果の果形の差は中で、無種子帯は少である。果皮色は赤、光沢は中、そう果の落ち込みは表皮並である。果肉色は淡紅、果実の空洞は小である。可溶性固形物含量は高く、Brixは8月で9%前後、10月以降は12%位まで上昇する。酸度及び香りは中で、食味は9月まで酸味が強いが、10月以降は甘酸適度となり良くなる。果実の硬さは中程度であるが、8分着色までに収穫すれば日持ちは良い。

2. 収穫

四季成性を生かす夏秋どり栽培をするので、第2表に示したとおり、開花から収穫までの期間は極めて短い。収量は第3表に示したとおり、大石四季成と比較して多収で、奇形果が少ない。

第2表 開花日から収穫日までの日数(1984年)

開花日	収穫日	一果重(g)	要した日数(日)	積算温度()
7.30	8.15	6.2	16	456.3
8. 6	8.23	6.0	17	477.3
8.16	9. 5	6.2	20	570.2
8.20	9.10	6.1	21	579.2
9.12	10.11	9.2	29	601.3

標高200m

第3表 収量調査結果(10株当たり1984年)

品種	調査期間	上果収量				上果収量計		一果重 (g)	奇形果 (コ)	総個数 (コ)
		大果		小果		個数 (コ)	重量 (g)			
		個数 (コ)	重量 (g)	個数 (コ)	重量 (g)					
大石 四季 成	8～10月	190	1,212	62	271.6	252	1,483.6	5.9	80	332
	11～12月	60	574.0	22	113.8	82	6,870.8	8.4	20	102
	計	250	1,786.0	84	385.4	334	2,171.4	6.5	100	434
みよし	8～10月	252	1,690.4	122	506.1	374	2,196.5	5.9	27	401
	11～12月	174	1,752.8	76	426.2	250	2,179.0	8.7	19	269
	計	426	3,443.2	198	932.3	624	4,375.5	7.0	46	670

標高200m 大果は10月まで5g以上, 11月以降7g以上

3. 生育

草姿は中間, 草丈は中であるが, 草勢は強い。ランナーの発生はやや少なく, 花房を摘除しないと発生は抑制され, 逆にランナーを放置すると花房の発生は連続しない。分けつは多く, 全ての腋芽より花房が発生する。花房の発生間隔は, 気温の高い夏秋期は短く, 気温の低くなる秋冬期は長くなる。7月上旬までのランナーを採苗した苗の花房発生は安定し, なりづかれにより一時中断することがあるが, 回復は早い。しかし, 7月中旬以降に発生するランナーを採苗した苗の花房発生は安定しない。その原因は第4表に示したように高温あるいは短日によると思われる。

第4表 採苗環境と開花(1986年)

試験区	開花株率(%)					
	9月9日	9月19日	10月2日	10月14日	10月27日	11月25日
(1)電照	0.0	90.0	90.0	90.0	90.0	100.0
(2)電照+遮光	45.5	100.0				
(3)無処理	0.0	14.3	28.6	28.6	28.6	71.4

標高200m.開花株率は頂花房が開花した率

鉢受日7月30日, 定植日8月22日, 電照日没より21時まで日長延長, 遮光 #600の黒寒冷紗

4. 病害虫

うどんこ病に対しては 芳玉 よりも強いが, 宝交早生 より弱く, 罹病性の品種である。高標高地で栽培すると, 本病は盛夏期でも発生するので, 育苗時からの防除が必要である。灰色かび病にも罹病性であるので防除の必要がある。萎黄病に対しては, 接種試験がされていないので不明であるが, 試験栽培や現地栽培では現在まで発生を認めていない。アブラムシ・ダニ類は他品種と同様に発生する。

5. 適作性

徳島県の標高900m以上の山間地において, 8月から11月のケーキ用イチゴの需要を満たす, 夏秋どり雨よけ栽培に適する。標高が低くなるほど盛夏期には小玉果の割合が多くなり, 不適となる。

低標高地においては作期を遅らせ, 気温の低くなる10月から12月に収穫する作型が可能である。そのためには, 採苗時期の確定と育苗法の確立が必要であり検討中である。

III. 命名の由来

育成地である徳島県立農業試験場池田分場は、徳島県三好郡にあり、また本品種は現地試作の段階から「味よし・色よし・香りよし」と評価されてきた経過と三好郡を関連させて みよし と命名した

IV. 摘要

1 山間地において、夏秋どりできる四季成り性イチゴの新品種を育成するため 媛育 × 大石四季成 を素材として、1980年より育種を開始した。

2 その結果、四季成り性で暑さに強く、収量・食味・果形・果皮色の良い品種を育成し、1985年に みよし と命名した。

3 果実は長円錐形で整っている。糖度が高く10月以降の食味は優れ、夏秋期の日持ちが良い。

4 草勢は強く、草姿・草丈とも中で、花房は連続して発生する。しかし、7月中旬以降に発生するランナーを採苗した苗の花房発生は安定しない。

5 適する栽培型は標高900m以上の山間地における、8月から11月のケーキ用イチゴの需要を満たす夏秋どり雨よけ栽培である。低標高地では小玉果の割合が多くなり、夏期の栽培には適さない。

引用文献

1 大宮汎(1985):期待されるイチゴ, 信州のそ菜, (362):7~8.